



小学生時代に枯れ枝をとりに登った松。当時より太く大きくなっているが、枝ぶりは変わらない。
今婦仁小学校横の松は、「仲原馬場の松並木」として県の文化財（史跡）に指定されている。終戦後、沖縄県内の市町村では学校の校舎を立て直すために、戦争で残った松の木を切って建材に使ったため、沖縄県内でも樹齢300年近い松はほとんど残っていない。当時、今婦仁小学校の校長だった照夫少年の父親だけが役場の方針に反対し、この松並木を守った。

ろうが、それにしても雌は薄情だなあと思ったり、妙に感心してみたり。
辺りの山野には野生のグアバの木やヤマモモの木がたくさんある。しかし、注意しなければならない。グアバの木の横にはよく蜂の巣があつて、ヤマモモの木の下にはハブがいる。家の裏にビワの木が20本くらいあつたが、果実を狙って鳥が来るので、その鳥を狙ってハブが寄つてきた。ハブは臆病なので、一方からガサガサと音を立てると退散するので、被害に

あうことはない。
当時は、みんな野生のグアバの実を採って食べていたものだが、危険を知らない子どもが、「わー！グアバの実がなつてる！」といつて無防備に近寄つてよく蜂に刺されていた。そういう事情もあつて、蜂の巣があるグアバは誰も採ることができずにいたが、照夫少年だけはあきらめなかった。尖ったソテツの葉で一人でシャシャッと扇ぐぐらいでは蜂の攻撃を防ぎきれないので、友達と二人で背中合わせで

ソテツの葉を素早く振り回して、身を守りながら、蜂の巣を叩き落とし、蜂を全部追いつ散らかしてから勝利宣言をして、グアバを採った。
大きな蜂の巣になると、ソテツの葉の二刀流では太刀打ちできない。石油を手に入れて、布に浸み込ませ、松明（たいまつ）をつくつて、マッチで火をつける。そして、蜂の巣を下から燃やして、勝利をつかみ取った。森の中で



指をさしているのは乙羽岳。自宅のあった今婦仁小学校から乙羽岳の頂上までは、直線距離で3kmほど。小学生～中学生の頃は、乙羽岳の周辺までがグアバやヤマモモの果実を採りに行ったりする活動範囲だった。

| （S・16） 1941 | （S・20） 1945 | （S・21） 1946 | （S・23） 1948 |
|------------------------------------|-------------------------------------|--|---|
| 今婦仁村の兼次に生まれる。 自宅は兼次小学校のそばの校長住宅。 | 小学校には日本軍が駐留。 陸軍兵の特攻の訓練風景をよく見ていた。 | 3歳の頃に終戦。 家族で捕虜にとられ、 辺野古の収容所で半年間ほど生活。 | 4歳の頃に、 今婦仁小学校の校長住宅に引越す。 戦後食糧難時代。 生きるための薪木集めや、 農園でのイモや野菜づくりを手伝った。 すぐ上の兄は勉強も運動も優秀、 校内で目立っていたため、 自分と弟はあまり注目されず。 |



校舎の近くにあるガジュマルの木。小学生の頃は、よくロープをひっかけてターザンごっこをして遊んだ。

夏、にわか雨が降って、辺りが湿って、空気が生暖かくなつて、太陽が沈んだ頃、妙な雰囲気を感じ、「こんな時に（ハブが）出てくる」というのがわかるようになった。ハブが出てくるときには普通の人には聞こえない「シュー」という声が聞こえるようになった。梅雨の後だと、朝、ハブが鳥を狙つて木の上にとりたつ。そういう時、鳥の恐怖に怯えた鳴き声が聞こえる。特にメジロは特徴的な鳴き声になる。

また、闇夜であつても「ここにハブがいる」という雰囲気を感じることが本能的に鍛錬された。秋から春の20℃以下の気温ではハブは絶対に出てこない、というのわからないので、ハブを警戒しながら慎重になつている人を尻目に、自分だけ平気で森の奥にドンドンと入っていくことができる。

ハブ退治のやり方は、大人がやっているのを見て覚えて、自分でも実際にやってみる。まず、背中の真ん中を打ちつけて骨折させ、動けなくしてから、頭をつぶすのである。ハブはだいたい雄と雌がペアで行動する。雌を先に狙つて、雄を取り逃がしても、雄は翌日必ずそこに戻ってくるので、両方とも獲ることができると。しかし、雄を先に殺すと、雌は二度と戻つてこない。場合によっては、その後で人が被害にあうこともある。子孫を残すために雌は「ひたすら逃げる」というのが遺伝子に書き込まれているのだ



嘉津宇岳(左のとんか町山)と八重岳(中央の丸いレーダーがある山)。嘉津宇岳の麓(ふもと)の右から八重岳にかけて一帯に野生のミカンの木がたくさんある。高校生の頃から秋になるとミカンを採りに行った。(自転車を使わず歩いて。)

1957 (S・32)
1956 (S・31)
1954 (S・29)
1952 (S・27)

～

今帰仁村内の森
(ジャングル)を歩き回り、
ハブや蜂と戦いながら
グアバなどの実をとって
遊んでいた。

小学5年の時から毎年、
春休み、夏休み、冬休みの間は
屋我地島の祖父の農業を手伝った。
農作業は兄弟の中で一番上手かった。
屋我地島でのイモや米づくりを
手伝いながら、プロ農家の
トレーニングを受けた。

今帰仁中学校に入学。
珍しい家畜や作物の品種に
興味があり、遠くまで歩いて
見に行った。

昭和30年頃から砂糖の
値段が上昇。
稲作からサトウキビへの
転換が進む。

父の転勤により屋我地島の
祖父の家へ引越す。

北部農林高等学校へ入学。
寮生活を送る。

サトウキビの収穫時期は土日
を中心に帰ってきて、手伝いをした。



屋我地島の母方の祖父の家。中学3年の頃に父が屋我地中学校に転勤になったのがきっかけで、比嘉一家も引越してきてここに住んでいた。家屋は60年前からずっと変わらない。現在は100歳を超える母が住んでいる。



屋我地島の祖父の農地で、当時イモやサトウキビを作っていた場所。奥に見える海岸ではエビを養殖していた。

礁の中の魚溜まりにゆつくり落とすと、そこにいる魚が酔っぱらって上がってくる。それを網ですくって獲る。その魚溜まりへ行くことができるのは、潮が一番沖まで引いてサンゴ礁が水面に出たときだけで、1年のうち、3日間くらいしかなかった。その時は学校を休んで魚獲りに行った。

花や野菜を育てるのも幼児の頃から大好きだった。ある大人にやり方を教わって、きちんとそれを実行していると、別の大人から「小さいのにすごいなあ」と褒められるのが嬉しかった。わが身のものだと思つて育てているので、作業をノルマだと思つたことはない。だから、他の子よりも上手にできるのは当然だった。母方の祖父が屋我地島に広い土地を持つており、春休み、夏休み、冬休みになると祖父のところで農作業の手伝いをしていて。兄弟の中でも一番農作業に秀でていたので、照夫少年が手伝いに来ると祖父は喜んだ。

小学校5年生の頃から、ハワイ帰りの祖父に能率主義、効率主義を鍛えられた。屋我地島は平地が広がり、今帰仁の農園とはスケールが全然違う。イモを育てたり、一人で1haの田んぼを任された。祖父に言われて牛、ヤギ、豚の糞と刈った草を積んで、海水と酵素を混ぜて作った堆肥でイモがよくできることを知った。その時はすごいと思っただけだったが、後にE.Mの研究を始

火をつけることは禁止されているため、大人にバレたら大変。いかに大人の監視の目をくぐりぬけて、自然と戦って勝利を得るかを考えていた。蜂ばかりでなく、木の上のハブにも火を試して成功したことがある。毎日そんな冒険ばかりしていた。

いろんなことに興味があった。トマトの栽培は戦前はほとんどなく、戦後、アメリカ軍に納入するためにトマトの大規模栽培プロジェクトが開始されると、早速見に行つた。また、誰かの家で豚が12匹生まれたと言うと、「新記録だ!」と言って見に行つた。中学生の頃は、土曜の午後、授業がないのに「ある」と親にうそをついて弁当をつくってもらい、羽地の種畜場に当時珍しかったホルスタインを見に行つた。20km以上ある道のりを歩いて。

魚獲りにもよく行つた。今帰仁の家から1.5kmくらい歩けば海に出る。大人に聞いた方法をまずやってみる。魚の動きをよく観察して、失敗体験から学ぶことが多かった。逃がした時には、何匹も欲張らず1匹だけを攻めればよかったとか、あそこの逃げ口をふさいでおけばよかったとか。また、餌付けをしてから何分後に魚が集まってくるのか、どこには貝が多いとか、どこにはのろまな魚が多いといったことなども、経験からいろいろ覚えた。

伊集の木の皮をむいて、叩いて揉んで、魚毒(沖縄方言でササ)を作つて、サンゴ



今帰仁城跡から眺める。今帰仁民家が少なく、林や森が広がっていた当時の風景を思う。